

門を出でず（菅原道真）

一たび 謫落せられて 柴荊に在りしより

万死 競々たり 跼蹐の情

都府楼は 纒かに 瓦色を看

観音寺は 只 鐘声を聴く

中懐 好し 孤雲を 逐うて 去り

外物 相逢うて 満月 迎う

此の地 身に 檢繫 無しと 錐も

何為れぞ 寸歩も 門を 出でて 行かん

一從謫落在柴荊 萬死兢兢跼蹐情
都府樓纒看瓦色 観音寺只聽鐘聲
中懐好逐孤雲去 外物相逢満月迎
此地雖身無檢繫 何爲寸歩出門行

解説 太宰府に左遷された道真の忠誠の心を表した詩。

語釈 ※謫落 罪をこうむり、官位を落されて配流されること。 ※柴荊 しばやいばらで作った門のある陋屋の意。 ※万死 罪万死にあたる、の意。 命を投げ出す。 ※兢兢 戦々兢兢として。 恐れ慎しむ。 ※跼蹐 恐れ懼れるあまり、天地の間に身の置きどころもないさま。 ※都府楼 太宰府の役所の高殿。 ※観音寺 普門院清水山観音寺。 ※中懐 胸中に抱き持つ感懐。 ※外物 外界の事象のすべて。 ※檢繫 くらられ、つながれる。 束縛に同じ。

通釈 自分は、身に覚えは無いにしても、天子の怒りに触れ、太宰府に流された身である。 罪を被って柴の戸に明け暮れる身となつてからは、罪万死にあたるを思い、戦々兢兢とし、広い天地の間にも、身の置きどころもない気持ちで謹慎している。 天子の命というより、私が私自身に逼塞を命じ、屋内に閉じ籠っている。 それが身の慎しみ方だと思つたため、太宰府の庁舎の高殿も、木の間より見え隠れする屋根の瓦の色を仰ぎ見るだけであり、近くの観音寺も一度も訪れた事とてなく、朝夕打ち鳴らす鐘の音を聞くばかりである。 また自分の胸中に抱き持つ感情も、あの碧空に浮かぶ一片の白雲が去るように浮世のことは一切忘れ、外部に対しては、満月が無心に万物を照らし迎えるような円満な心である。 名ばかりで実務の何もない閑職に置かれているといっても、私は太宰府の副長官であり、この身を拘束するものとして一切ないのであるが、どうして寸歩たりとて門を出て宜しかろうか。 ただ、ひたすら謹慎しているのである。